

美田の影に

八日市場を歩く

田植えを終えた市内の水田は緑が広がっています。中央地区下出羽の踏切を渡り県道48号線を野栄方面に向かい、大利根用水の八石橋を過ぎて進むと、左側にブロックで囲まれた「流れ灌頂かんじょう」に並んで石碑が立っています。この碑は、1964

(昭和39)年に立てられた大利根土地改良区理事長の撰文で上部に「農魂」と書かれ、この周辺の耕地整理の経緯が刻まれています。

農業の近代化が叫ばれた戦後、耕地整理の必要性が高まり、同土地改良区八日市場第5工区では昭和38年10月に総会が開かれ、翌11月から整理工事が開始されました。しかし、この年は近年まれに見る悪天候の連続で、工事は難航しました。それでもブルドーザー2台を使い、七間堀の埋め立てや低地

帯の改修、農道の設置など土砂を運び入れ、トロッコや一輪車を使い、延べ1万5000人余りの労働者を動員して完成させました。現在の総武本線南側の水田、総面積42・5ヘクタールがこの工事で区画整理されました。

この地域は碑文に「典型的な低湿地で、用排水は極めて悪く、水利権は近隣と幾多の問題を起こし」とあるように、江戸時代には横須賀村との間にあった沼をめぐって争論が起こり、1664(寛文4)年には「裁許絵図」が下し置かれました。

この沼は八日市場村では排水用に利用し、横須賀村は用水に使っていたため裁許後、両村は沼を新田に開発しないこと、溝さらいなど双方で協力することなどが申し渡されましたが、なかなか決められた通りには行かなかつたようです。

碑文に「その昔、葦蒲生い茂る原野であった所、1886(明治19)年先人の開拓により」とあることから、江戸時代に開発できなかった沼も明治になり手が加えられたようです。

「今や往時の低湿地帯も全く美田と変じ」と刻まれたように、先人の努力が「農魂」の碑により現在に伝えられています。

(市文化財審議会委員・

依知川雅一)

関秘書課広報聴班

☎73・0080



先人の努力を伝える「農魂」の碑